発刊のことば

佐々木　　享

技術教育は、国語教育がとりたてて国語を教え身につけさせる教育であり、数学教育がとりたてて数学を教え数学の考え方や手法を身につけさせる教育であるのと同様な意味において、技術を教え技術に関する知識と技能を身につけさせることを目的としている教育である。技術教育は、教師が教えようとし生徒が学びとろうとする教育内容を表わすことばによって特徴づけられた概念なのである。技術教育をこのように特徴づけると、技術教育において教えようとする内容は何か、技術教育でいうところの技術とは何かがただちに問題となる。技術教育の目的や内容、その社会的な意義等を明らかにしようとすることは、技術教育学研究の最も重要な課題のひとつであるが、さしあたりここでは、技術教育において課題としている技術は、あれこれの手法というような幅広く用いられる概念ではなく、物質的な財貨の生産にかかわる生産技術を意味していること、したがって技術教育の主要な内容としては生産技術に関する理論的な知識と実際、および技能の習得が問題となることを指摘するにとどめたい。

他方、職業教育は、ある特定の職業につこうとする者にたいして、その職業に従事するのに必要な知識や技能を身につけさせることを目的とする教育、あるいは、すでにある職業についている者にたいして、その職業上の知識や技能をいっそう拡張しその水準を向上させることを目的とする教育をさす。職業教育は、技術教育とは異なって、その教育が目的としていることがらによって特徴づけられた概念である。

技術教育と職業教育とは、両者を特徴づける契機が異なっているのであるが、現実には、混用あるいは混同されている場合も少くない。それは、現実の職業教育の内容が技術教育というべき内容によって構成されている場合が少なからずあり、また、技術教育が職業教育という性格をおびている場合が少くないからである。しかしこのことは他面で、職業教育には、商業教育などのように技術教育とは言えないものが含まれること、また、技術教育には現今の初等教育のそれのように職業教育という性格をおびていないものが少なくないことをも示唆している。こうした問題に言及したのは、技術教育学研究が、観念的につくりだした技術教育の諸問題を研究するのではなく、現実に存在する技術教育の諸問題を研究することを課題としているために、職業教育の諸問題にもたち入らざるを得ない性格をもっていることを明らかにしたかったからであるが、同時に、技術教育と職業教育とを徒らに混同することなく、両者の性格の違いを明らかにしておくことも技術教育学研究に従事しようとする者にとって必要な配慮であろうと思われるからである。

技術教育の存在形態は多様であって、また国情，民族的な事情によって複雑な形態で発展して

いる。私たちは、その複雑にいりくんだ糸をひとつひとつ解きほぐしていく仕事をしなくてはならない。しかし、技術教育学研究は、究極的には、すべての教育学研究がそうであるように、ヒトが人間になるために、ヒトが人間社会に貢献し得る人間になるために必要な、教育の思想，内容，方法，制度のあり方、またその発展法則を明らかにするという遠大な課題の一翼をになっている。コメニウス以来の近代教育学においては、このことが深く自覚されてきたように思われる。しかしながら、わが国に限っていえば、技術教育に関しては、それぞれの時代の社会的な要請に応えて多様な技術教育，職業教育が発達してきたが、これを教育学上の研究課題としてとらえる自覚は決して充分なものではなかった。この自覚の歴史，内容を明らかにすること自体が技術教育学研究の重要な課題のひとつであるからいまはたち入らないが、名古屋大学が全国にさきがけて教育学の分野で独立した技術教育学講座をもうけたのが1980年であったという一事をもってこの証左とすることができよう。（ただし、北海道大学教育学部には、戦後早くから、産業教育講座が設けられている。）

名古屋大学教育学部の技術教育学講座は、当初、学内措置によるいわゆる講座外講座として設置され、長谷川淳教授がこれを担任した。同教授が76年に退官され、佐々木享がそのあとを継いだが、80年4月に至ってようやく技術教育学講座が正規の、つまり政令上に明記されたいわゆる官制上の講座となったのである。こうした経過にみられるように、この講座の歴史は極めて新しいし、関連するスタッフもまだ佐々木と80年2月に着任した堀内達夫助手の2名だけである。しかし、逐年、若い大学院生諸君も迎えて研究活動も次第に活発になってきたので、技術教育学研究という古くて新しい学問領域に鍬を入れるべく、ここにこのようなかたちで冊子を刊行することとしたのである。（1982年3月24日記）